

氏名（本籍）	胡 亜敏
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 9733 号
学位授与年月日	令和 2 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日中両言語の主題構文に関する理論的考察

主	査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	竹沢 幸一
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	加賀 信広
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本 武
副	査	筑波大学 准教授	博士（学術）	澤田 浩子

論文の要旨

本論文は、中国語と日本語が主題構文に関して見せる2つの相違点に着目し、それらに対して生成文法理論の枠組みに基づき、統語的な対照分析を試みたものである。

これまでの言語類型論的な研究では、中国語も日本語も「主題卓越型言語」(topic-prominent language)として分類されており、共通した性質を持つことが指摘されてきた (Li and Thompson 1976)。しかし詳しく観察してみると、両言語の間には主題構文に関してかなりの違いが見られる。本論文では、日本語との間に違いを見せる2つの中国語主題構文に焦点を当て、それらが提起する問題に対して、生成文法理論の観点から対照言語学的分析を提案している。

本論文で分析の対象となるのは、次の2つの現象である。

① 一般に焦点マーカールと見なされている“连”(lian)と「さえ／も」の主題位置への出現について中国語において“连”は“都”(dou)という要素と組み合わせることで“连……都”焦点構文を構成する (Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007; Tsao 1989; Paris 1994; 何元建 2011 など)。しかし、“连”は文頭の主題位置に出現できるのに対して、日本語でそれと等価の意味を表す「さえ」や「も」が主題位置へ生起することは決して容認されない。

② 動詞の主題位置への出現について

中国語の動詞はそのままの形で主題位置に現れることが可能であるのに対して、日本語の動詞が主題位置に出現するためには「こと／の」という名詞化辞を伴う必要がある。本論文では、この2つのタイプの主題構文に対して、それぞれの経験的な事実を確認しつつ、生成文法理論の観点から統語構造に基づく分析が提案される。

本論文の構成は以下の5章からなる。

第1章 序論

第2章 先行研究の概観と問題の所在

第3章 主題と焦点の区別：“连”の主題化現象から

第4章 動詞（句）主題構文

第5章 結論

それぞれの章の内容は以下のとおりである。

第1章では、研究の背景および本論文で扱う主題構文の概要と目的が提示される。

第2章では、議論の前提として、主題構文に関するこれまでの一般的な観察が整理され、その通言語的な特徴が示される。また、言語類型論の観点から主題に関する世界言語の分類が再確認される。続いて、英語の主題に関する研究に基づき、本論文において中心的な研究対象となる中国語と日本語の主題に関する特徴が意味・語用と統語という2つの領域に分けて提示される。最後に、先行研究では十分に議論されていない事実、および先行研究で残された問題点が指摘され、本論文の研究目的と関連づけられる。

第3章と第4章では本論文の中心となる中国語の“连……都”焦点構文と動詞主題構文の分析がそれぞれ提示される。まず第3章では、中国語の“连……都”焦点構文を分析対象にして統語的考察が行われる。中国語では一般的に文頭の位置は主題を担っていると見なされているが、焦点マーカーとされる“连”はその文頭位置に生起可能であり、主題として出現できる。一方、かき混ぜ規則が適用可能な日本語は、語順が比較的自由であるため、「さえ／も」が目的語を伴って文頭に生起できるが、形態的な主題マーカー「は」とは共起できない。つまり、同じ焦点マーカーとして見なされる“连”と「さえ／も」は主題位置への生起という点で違いが見られる。

この相違点に対して、本論文では、先行研究の分析（Shyu 1995, 2014 など）と新たな経験的な事実に基づき、“连……都”焦点構文において“连”は焦点マーカーの機能を果たさないため、主題位置に出現できるとの議論が展開される。さらに、“连……都”焦点構文において、焦点マーカーとして機能するのはむしろ“都”のほうであり、“都”には日本語の「さえ」と「も」の両方の性質を併せ持っているとの分析が両言語の作用域の比較に基づいて提示される。さらに以上の議論からの帰結として、“都”を含めて元から焦点機能を持つ要素は中国語でも日本語でも主題にならないという一般化が提案される。

続く第4章では、日本語と中国語のもう一つの相違点である動詞が主題位置に現れる現象について考察が行われる。中国語でも日本語でも、動詞が元位置にそのコピーを残したまま、文頭の主題位置に生起するいわゆる動詞重複の構文形式が見られる。しかし、中国語の場合には文頭の動詞がそのままの形態で主題を担うことができるのに対して、日本語の場合には名詞化辞「こと／の」が伴われなければならない。本論文では、この対立に対して、動詞がどのように文頭に生起するのかに関する議論を出発点として、日中両言語の共通点と相違点が捉えられる。特に中国語の場合、その生起方法については、動詞そのものが元位置にコピーを残して文頭に移動しているという分析方法がこれまで提案されている（Cheng and Vicente 2013）。また、主題位置にある動詞の性質については、動詞性が失われた要素であるとの分析も提示されている（Tsao 1987）。しかし、この2つの分析の間には、動詞そのものが移動しているならば、文頭に移動した動詞と後ろに残された動詞の範疇の間に食い違いが生じてしまうという矛盾が存在することが指摘される。

この矛盾を解決するために、本論文では、動詞が主題位置に生起する場合には、島の条件（island conditions）が関与するため必ず何らかの移動が生じているとの主張を維持しつつ、新たな移動分析が提案される。それは、「分散形態論」（Distributed Morphology）の観点から、動詞そのものが移動しているのではなく、まずは範疇が決まっていない√（ルート）が移動し、その後、主題位置にある空の名詞化辞によって名詞化されるという分析である。そして、さらなる経験的事実に関する観察を通して、中国語の動詞主題化構文において、主題位置に現れる動詞や動詞句の統語的な性質が明らかにされる。

最後の第5章では、結論のまとめと今後の展望が示される。

審査の要旨

1 批評

日本語と中国語は類型論上、ともに主題卓越型言語に分類されており、関連性主題の生起など、多くの共通性を持つ。これまでの両言語の主題構文に関する対照研究は、主に主題卓越型言語としての共通性に目が向けられており、両言語間の違いが表面的事実の指摘を越えて理論的分析の対象となることはあまりなかった。本論文は、両言語の主題構文に見られる二つの相違点に着目し、そうした差異に対してどのような体系的説明が可能なのか、生成文法理論に基づく対照分析を試みており、その点で伝統的な問題に対する新しい切り口からの研究となっている。

本論文が取り上げている日中両言語間の一つ目の相違点は、日本語の焦点要素「さえ／も」に意味的に対応する中国語の“连”が主題位置に現れることができるのに対して、日本語の「さえ／も」の場合には主題マーカ「は」と共起することができないという対立である。“连”についてはこれまで中国語研究の中でも盛んに議論されてきた問題であり、それを焦点要素と見なすべきか否かという点で対立する分析が提案されてきた。本論文では、「さえ／も」の現れ方とその作用域に関する事実との比較から、“连……都”構文において焦点を担うのは“连”ではなく、それと共起している“都”の方であるとの結論を導いており、この分析は言語間の対照に基づいた著者独自の提案となっている。これまでもつばら中国語内部の問題として扱われてきた“连”の主題位置への生起に対して、日本語研究からの知見に基づいて矛盾を解消しようとする分析は対照研究の有効性を示したものであることができる。

また、本論文で扱われているもう一つの相違点である動詞主題構文の考察についても、言語間の対照研究の有効性を示す分析となっている。日本語の場合、動詞主題構文では明示的な名詞化辞「こと／の」が主題位置に現れるのに対して、中国語ではそうした名詞化辞なしで動詞がそのまま主題位置に現れることができるという点で対立をなしている。しかし、それは見かけ上の違いであり、日本語の動詞主題文が「こと／の」によって名詞化されているのと同様に、中国語でも空の名詞句辞が存在しており、動詞がその空の名詞化辞に移動することによって派生するという日本語からの知見に基づいた分析が提案されている。さらに、著者はこの日本語からの知見を分散形態論に基づいた√（ルート）移動と組み合わせることによって、中国語の動詞主題構文の派生には移動が関与しているという事実にも理論的な説明を与えている。

もちろん、主題という概念に関わる現象は広範にわたるものであり、本論文が扱ったのはその一部に過ぎない。しかし、本論文の価値は、これまであまり取り上げられてこなかった主題構文に関わる事実に着目し、それらを体系的にまとめ上げることのできる理論的説明を提案することによって、日中両言語の異同に対する対照言語学的分析を具体的に提示している点にある。その点で、本論文は日中両言語の主題構文、さらには主題現象一般の研究に対して記述・理論の両面から重要な貢献をなしていることができる。

2 最終試験

令和2年10月20日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。